

# 生身の日韓交流

## 考えに変化

この夏は戦後70年。テレビも新聞もかつての戦争について例年以上に取り上げており、平和について考えさせられます。

自由の森学園高校の選択講座に「韓国講座」という授業があります。毎年、夏に韓国を訪ね、歴史や文化を学び現地の高校生と交流します。逆に冬には韓国の高校生が日本に来ます。

今年も8月初旬、16人が韓国を訪ねました。参加者に旅行の感想を聞いてみました。

高校1年のAさんは、小学校のころからKポップと辛いものが大好きで、入学前からこの講座をとりたいたいと思っていたそうです。一番印象深かったことはホームステイ。Aさんは片言の韓国語しか話せないのに、受け入れた家の父親が日本語を勉強

### 生徒の相互訪問

## はぐくむ

してくれており、ステイ中、互いに教え合ったそうです。

同じ高校1年のKさん。4日間の交流を経て別れの時、韓国の高校生たちが泣き出し、双方感激の場面になったそうです。

Kさんは、たった4日間なのにこんなに深くなれるんだなあと思いました。言葉が思うように通じないなか、互いに一生懸命に努力して伝わった時のうれしさがあったと語ります。

3年生のC君は、相手の高校生がベトナム戦争時の加害についても実際に足を運んで勉強してきたということに共感が持てたと言います。言葉と文化の違いを除けば、同じ高校生なんだと感じたとのこと。

彼は、以前から韓国と日本がいがみ合っていると感じていました。ネット情報を見て怖かっ

た部分もあつたと語ります。AさんもKさんも韓国で何か言われるのかなと気になってはいたそうです。Aさんは、怖いと言えば怖いと思っていたけど、それより韓国の高校生と話したいという思いが強く、結果、行ってみてよかつたと言います。

Kさんのパートナーは別れ際に、これから日本語を勉強するねと伝えてくれたそうです。彼らが一緒に話すのは、実際に触れ合うことで、それまで抱いていた様々な不安や思いが大きく変わったことです。国レベルでは反発する磁力が働いていますが、1人の高校生として生活を共にしてみると、人間としての結びつきを強める力が生じます。帰国後もSNSでやり取りする高校生たちですが、その土台はやはり人と人との生身の交流なのだ実感しました。

自由の森学園理事長

鬼沢真之